

◎指示があるまで開かないこと。

(令和5年2月5日 16時00分～18時30分)

注 意 事 項

1. 試験問題の数は75問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) (例1)、(例2)の問題ではaからeまでの5つの選択肢があるので、そのうち質問に適した選択肢を(例1)では1つ、(例2)では2つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例1)の質問には2つ以上解答した場合は誤りとする。(例2)の質問には1つ又は3つ以上解答した場合は誤りとする。

- (例1) 101 医業が行えるのはどれか。
- a 合格発表日以降
 - b 合格証書受領日以降
 - c 免許申請日以降
 - d 臨床研修開始日以降
 - e 医籍登録日以降
- (例2) 102 医籍訂正の申請が必要なのはどれか。2つ選べ。
- a 氏名変更時
 - b 住所地変更時
 - c 勤務先変更時
 - d 診療所開設時
 - e 本籍地都道府県変更時

(例1)の正解は「e」であるから答案用紙の **e** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

101	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e
			↓		
101	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input checked="" type="radio"/>

答案用紙②の場合、

101	101
<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> a
<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> b
<input type="radio"/> c	→ <input type="radio"/> c
<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> d
<input type="radio"/> e	<input checked="" type="radio"/>

(例2)の正解は「a」と「e」であるから答案用紙の **a** と **e** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

102	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e
			↓		
102	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input checked="" type="radio"/>

答案用紙②の場合、

102	102
<input type="radio"/> a	<input checked="" type="radio"/>
<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> b
<input type="radio"/> c	→ <input type="radio"/> c
<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> d
<input type="radio"/> e	<input checked="" type="radio"/>

(2) (例3)では質問に適した選択肢を3つ選び答案用紙に記入すること。なお、

(例3)の質問には2つ以下又は4つ以上解答した場合は誤りとする。

(例3) 103 医師法に規定されているのはどれか。3つ選べ。

- a 医師の行政処分
- b 広告可能な診療科
- c 不正受験者の措置
- d 保健指導を行う義務
- e 都市部で勤務する義務

(例3)の正解は「a」と「c」と「d」であるから答案用紙の○aと○cと○dをマークすればよい。

答案用紙①の場合、

103	○a	○b	○c	○d	○e
			↓		
103	●	○b	●	●	○e

答案用紙②の場合、

103	103
○a	●
○b	○b
○c	→ ●
○d	●
○e	○e

- (3) 計算問題については、□に囲まれた丸数字に入る適切な数値をそれぞれ1つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例4)の質問には丸数字1つにつき2つ以上解答した場合は誤りとする。

(例4) 104 68歳の女性。健康診断の結果を示す。

身長150 cm、体重76.5 kg(1か月前は75 kg)、腹囲85 cm。体脂肪率35%。

この患者のBMI(Body Mass Index)を求めよ。

ただし、小数点以下の数値が得られた場合には、小数第1位を四捨五入すること。

解答：① □ ② □

(例4)の正解は「34」であるから①は答案用紙の③を、②は④をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

104	①	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	②	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

答案用紙②の場合、

104	
①	②
0	0
1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9

(4) 選択肢が6つ以上ある問題については質問に適した選択肢を1つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例5)の質問には2つ以上解答した場合は誤りとする。

(例5) 105 令和2年医師・歯科医師・薬剤師統計で人口10万人当たりの医師数が最も少ないのはどれか。

- a 北海道
- b 青森県
- c 茨城県
- d 埼玉県
- e 京都府
- f 和歌山県
- g 鳥取県
- h 徳島県
- i 佐賀県
- j 沖縄県

(例5)の正解は「d」であるから答案用紙の **(d)** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

105	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)	(i)	(j)
105	(a)	(b)	(c)	●	(e)	(f)	(g)	(h)	(i)	(j)

答案用紙②の場合、

105	105
(a)	(a)
(b)	(b)
(c)	(c)
(d)	●
(e)	(e)
(f)	(f)
(g)	(g)
(h)	(h)
(i)	(i)
(j)	(j)

1 Tリンパ球機能低下による日和見感染症でないのはどれか。

- a 粟粒結核
- b 食道カンジダ症
- c 肺炎球菌性肺炎
- d ニューモシスチス肺炎
- e サイトメガロウイルス感染症

2 汎血球減少を呈するのはどれか。2つ選べ。

- a 赤芽球癆
- b 鉄欠乏性貧血
- c 再生不良性貧血
- d 骨髄異形成症候群
- e 慢性リンパ性白血病

3 ノーマライゼーションに関係するのはどれか。

- a バリアフリーの推進
- b リビングウィルの尊重
- c セカンドオピニオンの利用
- d ヘルスプロモーションの啓発
- e インフォームド・コンセントの徹底

- 4 新生児の生理的黄疸の成因に**関与しない**のはどれか。
- a 多血症
 - b 腸肝循環
 - c 赤血球寿命
 - d 血清アルブミン値
 - e グルクロン酸抱合酵素活性
- 5 せん妄について正しいのはどれか。3つ選べ。
- a 脱水は発症要因となる。
 - b 治療によらず改善は見込めない。
 - c 数時間から数日で急速に発症する。
 - d 身体疾患を背景に持つことが必須である。
 - e 日内変動がありしばしば夜間に増悪する。
- 6 医療関連死に**含まれない**のはどれか。
- a 術中の大量出血による死亡
 - b 輸液ポンプの誤用による死亡
 - c 負荷心電図検査中の心室細動による死亡
 - d 在宅療養中の肺がん終末期の肺炎による死亡
 - e 入院中に発生した重度褥瘡に起因する敗血症による死亡

7 正常な妊娠経過において妊娠前と比較して妊娠中期に低下するのはどれか。2つ
選べ。

- a 血 圧
- b 体 重
- c 血漿浸透圧
- d 循環血液量
- e 糸球体濾過量

8 右利き患者の頭部単純 MRI の FLAIR 像(別冊No. 1A～E)を別に示す。

Wernicke 失語を認めるのはどれか。

- a A
- b B
- c C
- d D
- e E

別 冊

No. 1 A～E

9 高齢者で誤嚥を疑う所見として誤っているのはどれか。

- a 発 熱
- b 湿性咳嗽
- c 味覚障害
- d 喀痰の増加
- e 飲水時のむせ

10 膀胱の蓄尿症状はどれか。2つ選べ。

- a 尿意切迫感
- b 尿勢低下
- c 排尿遅延
- d 腹圧排尿
- e 夜間頻尿

11 疾患と視野異常の組合せで正しいのはどれか。

- a 緑内障 ————— 中心暗点
- b 視神経炎 ————— 求心性狭窄
- c 加齢黄斑変性 ————— 弓状暗点
- d 網膜色素変性 ————— 輪状暗点
- e 中心性漿液性網脈絡膜症 ———— らせん状視野

12 口腔内アフタの存在が診断に有用なのはどれか。

- a 腸結核
- b Crohn 病
- c 大腸憩室症
- d 虚血性大腸炎
- e 過敏性腸症候群

- 13 副腎腺腫による Cushing 症候群で認めないのはどれか。
- a 円形顔貌
 - b 眼瞼浮腫
 - c 骨粗鬆症
 - d 色素沈着
 - e 皮膚線条
- 14 出生後、緊急で治療介入が必要な疾患はどれか。
- a 心房中隔欠損症
 - b 心室中隔欠損症
 - c 完全大血管転位症
 - d 部分肺静脈還流異常症
 - e 房室中隔欠損症〈心内膜床欠損症〉
- 15 挫滅〈圧挫〉症候群の血液検査で高値を示さないのはどれか。
- a カリウム
 - b カルシウム
 - c CK
 - d ヘマトクリット
 - e ミオグロビン

16 肝細胞癌に対し肝動脈化学塞栓療法が行われるのはどれか。

	肝予備能	腫瘍の最大径	腫瘍の個数	肝外転移	門脈本幹閉塞
a	Child A	4 cm	4	なし	なし
b	Child A	4 cm	4	あり	なし
c	Child B	4 cm	4	なし	あり
d	Child B	4 cm	4	あり	なし
e	Child C	4 cm	4	なし	なし

17 「周りの景色を見ても生き生きと感じられない。感情がわいてこない」と訴える患者にはどの異常があるか。

- a 意識
- b 気分
- c 知覚
- d 見当識
- e 自我意識

18 食思不振により体重が減少するのはどれか。2つ選べ。

- a 糖尿病
- b 副腎不全
- c 褐色細胞腫
- d Basedow 病
- e 副甲状腺機能亢進症

19 待期的に行う全身麻酔下の手術で、術前に確保すべき清澄水の絶飲時間はどれか。

- a 15分
- b 2時間
- c 6時間
- d 12時間
- e 24時間

20 フレイルの予防策として誤っているのはどれか。

- a 毎日歯を磨く。
- b 運動習慣をつける。
- c よく嚙んで食べる。
- d 蛋白質摂取を制限する。
- e ボランティアなどの社会活動に参加する。

21 ビタミン K が欠乏すると活性が低下する因子はどれか。

- a 第V因子
- b 第Ⅷ因子
- c プロテイン C
- d フィブリノゲン
- e アンチトロンビン

- 22 身近な人との死別に伴う悲嘆反応で誤っているのはどれか。
- a 成人特有の反応である。
 - b うつ病との鑑別が必要である。
 - c 身体的影響を生じる。
 - d 提供されるケアをグリーフケアという。
 - e 時間とともに軽快する。
- 23 高齢者が転倒した際、骨折をきたしやすい部位はどれか。3つ選べ。
- a 上腕骨
 - b 大腿骨
 - c 橈骨
 - d 脛骨
 - e 腓骨
- 24 統合失調症を主な対象として、精神症状の包括的な評価尺度として使用されるのはどれか。
- a Rorschach テスト
 - b 状態特性不安検査<STAI>
 - c リバーミード行動記憶検査<RBMT>
 - d Mini-Mental State Examination<MMSE>
 - e 簡易精神症状評価尺度[Brief Psychiatric Rating Scale<BPRS>]

- 25 末梢血好中球について正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 減少症の原因として薬剤性が最も多い。
 - b 副腎皮質ステロイドの投与で増加する。
 - c 成人の末梢血多核白血球の約60%を占める。
 - d 発熱性好中球減少症での基準は $1,500/\mu\text{L}$ 以下である。
 - e 急性細菌感染症では桿状核に比し分葉核の割合が増加する。

26 デルマドロームでないのはどれか。

- a Sweet病
- b 皮膚筋炎
- c 黒色表皮腫
- d 日光角化症
- e 壊疽性膿皮症

27 疾患と症候の組合せで誤っているのはどれか。

- a Hodgkinリンパ腫 ————— 間欠熱
- b 菌状息肉症 ————— 皮膚腫瘤
- c 多発性骨髄腫 ————— 紅皮症
- d マクログロブリン血症 ————— 網膜静脈怒張
- e 慢性リンパ性白血病 ————— 肝脾腫

28 高齢労働者の作業安全を図る取り組みとして**適切でない**のはどれか。

- a 通路の段差を解消する。
- b 警報音は高音域の音とする。
- c 作業場所の照度を確保する。
- d 危険箇所は標識で注意喚起する。
- e 腰を低い位置に下げたから重量物を持ち上げる。

29 生活習慣行動の変容に**効果的でない**のはどれか。

- a 自分で目標を設定する。
- b 自分の行動を記録する。
- c 行動変容の規範意識を高める。
- d 行動変容ステージに合わせた方法を選ぶ。
- e 変容が得られないときは意思を強く持つよう指導する。

30 月齢とその時期にみられる反射との組合せで**誤っている**のはどれか。

- a 1か月 ————— Moro 反射
- b 3か月 ————— 足底把握反射
- c 6か月 ————— Landau 反射
- d 9か月 ————— パラシュート反射
- e 12か月 ————— 非対称性緊張性頸反射

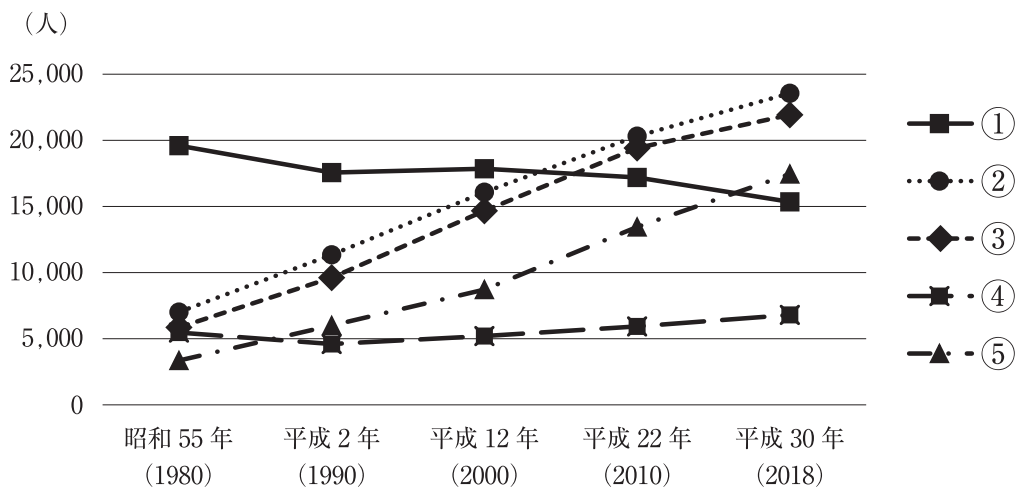
31 手術中に行う迅速病理診断で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 予定手術全例に対して行われる。
- b 目的として切除範囲の決定がある。
- c 検体をホルマリンに浸漬して提出する。
- d 凍結してから切片を作成する。
- e 免疫染色を行う。

32 躁状態でみられないのはどれか。

- a 多 弁
- b 浪 費
- c 易怒性
- d 見当識障害
- e 睡眠欲求の減少

33 女性における肺、胃、膵、大腸および子宮の悪性新生物死亡数の推移を示す。



⑤はどれか。

- a 肺(気管、気管支および肺)
- b 胃
- c 膵
- d 大腸(結腸、直腸 S 状結腸移行部および直腸)
- e 子宮

34 医師法に規定されているのはどれか。

- a 医師の免許
- b 医師の守秘義務
- c 医療機関の種類
- d 医療の安全の確保
- e 特定機能病院の要件

35 52歳の男性。貧血を指摘されたことを主訴に来院した。3日前に少量の下血があり、自宅近くの医療機関で採血を行ったところ貧血を認め、紹介受診した。心房細動、不安障害、脳動脈瘤および慢性便秘症のため通院しており、抗凝固薬、抗不安薬および緩下薬が処方されている。緩下薬の服用で、排便は2日に1回、普通便である。23歳時に虫垂切除術の既往がある。脳動脈瘤の経過観察のため頭部MRAが予定されている。身長172cm、体重62kg。体温36.1℃。脈拍96/分、不整。血圧126/78mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。腹部は平坦で、圧痛はない。肝・脾を触知しない。腸雑音に異常を認めない。上部消化管内視鏡検査と下部消化管内視鏡検査で異常を認めず、出血源の精査のためカプセル内視鏡を行うこととした。

この患者でカプセル内視鏡を行う際に最も注意が必要なのはどれか。

- a 排便の頻度
- b 腹部手術の既往
- c 抗凝固薬休薬の可否
- d 抗不安薬の内服状況
- e 頭部MRAの検査予定日

36 生後1分の女児。在胎40週5日、経膈分娩で出生した。心拍は6秒間に12回、啼泣は強い。四肢を活発に動かし、刺激に対して咳嗽を認める。皮膚にわずかに胎便が付着している。皮膚色は全身暗紫色である。

この児のApgarスコアはどれか。

- a 6点
- b 7点
- c 8点
- d 9点
- e 10点

37 35歳の女性。急性骨髄性白血病のため入院中である。寛解導入療法開始後18日目に発熱を認めた。発熱以外の症状はない。体温38.2℃。脈拍112/分、整。血圧102/68 mmHg。呼吸数20/分。眼瞼結膜は貧血様である。身体所見にその他の異常を認めない。血液所見：赤血球288万、Hb 8.8 g/dL、Ht 26%、網赤血球0.1%、白血球500(好中球1%、好酸球0%、好塩基球0%、単球0%、リンパ球99%)、血小板2.1万。

この時点での抗菌薬選択に際し、最も考慮すべき微生物はどれか。

- a *Clostridium perfringens*
- b *Enterococcus faecalis*
- c *Haemophilus influenzae*
- d *Moraxella catarrhalis*
- e *Pseudomonas aeruginosa*

38 4か月の女児。活気不良と哺乳量の減少を主訴に母親に連れられて来院した。周産期に異常はなかった。1週間前から活気が低下し、2日前から約20%哺乳量が減少してきた。昨夜の便は黒っぽかった。本日も活気の回復がみられないため心配になり、自宅近くの診療所の夜間救急外来を受診した。意識は清明。体温36.8℃。心拍数136/分、整。呼吸数24/分。顔色はやや不良。心音と呼吸音ともに異常を認めない。頸部にリンパ節を触知しない。腹部は軽度膨隆を認める。紫斑を認めない。毛細血管再充満時間の延長はない。血液所見：赤血球209万、Hb 5.6 g/dL、Ht 18%、白血球950,000、血小板1.5万。血液生化学所見：AST 34 U/L、ALT 16 U/L、LD 1,390 U/L(基準120~245)、尿酸8.6 mg/dL、Na 139 mEq/L、K 4.4 mEq/L、Cl 106 mEq/L。CRP 2.1 mg/dL。

母親への説明として適切なのはどれか。

- a 「点滴をしてから帰りましょう」
- b 「もっと早く受診するべきでした」
- c 「明日かかりつけ医に相談してください」
- d 「専門の病院に緊急入院して精査が必要です」
- e 「命にかかわることはないので心配は要りません」

39 52歳の男性。労作時息切れと全身倦怠感を主訴に来院した。1か月前から両下腿の浮腫が出現し、1週間前から労作時息切れと全身倦怠感も自覚するようになったため受診した。15年前から高血圧症と糖尿病で治療を受けていたが、10か月前の転居を契機に受診を中断していた。身長176 cm、体重85 kg(2か月前は78 kg)。脈拍92/分、整。血圧162/92 mmHg。SpO₂95%(room air)。両下腿に圧痕性浮腫を認める。尿所見：蛋白3+、糖2+、ケトン体(-)、潜血(-)。随時尿の尿蛋白480 mg/dL、クレアチニン80 mg/dL。血液所見：赤血球310万、Hb8.6 g/dL、Ht28%、白血球8,600、血小板12万。血液生化学所見：総蛋白5.2 g/dL、アルブミン2.2 g/dL、尿素窒素30 mg/dL、クレアチニン1.6 mg/dL、尿酸7.6 mg/dL、血糖230 mg/dL、HbA1c8.0%(基準4.6~6.2)、Na136 mEq/L、K5.8 mEq/L、Cl⁻98 mEq/L、Ca7.6 mg/dL、P5.2 mg/dL。胸部エックス線写真で心拡大と肺うっ血を認める。

この患者の治療で、まず投与すべきなのはどれか。

- a 新鮮凍結血漿
- b 赤血球濃厚液
- c ループ利尿薬
- d アルブミン製剤
- e 維持輸液(組成：Na⁺35 mEq/L、K⁺20 mEq/L、Cl⁻35 mEq/L、グルコース5.0%)

40 57歳の女性。左下肢のむくみを主訴に来院した。約1年前から長時間の立ち仕事の際に両下肢の重さを自覚しており、約4か月前からは左下肢のむくみが出現した。15年前に子宮体癌の手術歴がある。体温36.0℃。脈拍72/分、整。血圧130/74 mmHg。呼吸数16/分。SpO₂98%(room air)。頸静脈の怒張を認めない。甲状腺と頸部リンパ節を触知しない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知せず、下腹部に手術瘢痕を認める。両下肢の写真(別冊No. 2)を別に示す。左脛骨前面を母指で5秒間圧迫しても圧痕は生じない。

現時点で最も可能性が高いのはどれか。

- a 下肢静脈瘤
- b リンパ浮腫
- c 甲状腺機能低下症
- d ネフローゼ症候群
- e 閉塞性動脈硬化症

別 冊

No. 2

41 57歳の男性。定期受診で来院した。30歳時に2型糖尿病および高血圧症と診断され、自宅近くの総合病院に通院している。腎機能が徐々に悪化したため、1か月前に妻から生体腎移植を受けた。インスリン注射、降圧薬と複数の免疫抑制薬が処方されている。身長175 cm、体重65 kg。脈拍72/分、整。血圧126/70 mmHg。頸部と胸部とに異常を認めない。腹部に手術痕を認める。両側アキレス腱反射は消失している。尿所見：蛋白(－)、潜血(－)。血液所見：赤血球350万、Hb 10.0 g/dL、Ht 30%、白血球6,200、血小板35万。血液生化学所見：尿素窒素25 mg/dL、クレアチニン0.7 mg/dL、eGFR 89.8 mL/分/1.73 m²、HbA1c 6.9%(基準4.6～6.2)、Na 143 mEq/L、K 4.8 mEq/L、Cl 105 mEq/L。

この患者への説明で適切なのはどれか。

- a 妻の定期受診は不要である。
- b 海外旅行に行くことはできない。
- c インフルエンザワクチンは接種できない。
- d 定期的な悪性腫瘍スクリーニングが必須である。
- e 移植を受けた患者の半数で移植10年後に再び透析が必要になる。

42 75歳の女性。全身倦怠感を主訴に来院した。1年前に骨転移を伴う進行肺小細胞癌と診断され、腰椎骨転移に対して放射線照射を施行後、薬物による抗癌治療が行われたが効果が乏しく、3か月前から薬物による抗癌治療は行わない方針となった。1週間前から全身倦怠感が著明となり入院した。意識は清明であるが受け答えは緩慢である。身長161 cm、体重42 kg。体温36.9℃。脈拍104/分、整。血圧112/62 mmHg。呼吸数20/分。SpO₂95%(room air)。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。腰背部に叩打痛を認める。胸腹部・骨盤部CTで多発腰椎転移の増悪を認めたが、既に放射線照射を施行した部位であり、再照射は不可能と判断された。疼痛コントロールのためオキシコドン20 mg/日の経口投与を開始したが、5日経過後も疼痛コントロールは十分でなく、嚥下障害で内服が困難となったため経口薬を中止した。

オピオイドローテーションとして適切なのはどれか。

- a 高用量塩酸モルヒネを急速静注する。
- b 塩酸モルヒネを経鼻胃管から投与する。
- c オキシコドンの持続点滴静注を開始する。
- d モルヒネ塩酸塩水和物坐薬を3時間ごとに投与する。
- e フェンタニル口腔粘膜吸収剤を1時間ごとに投与する。

43 45歳の女性。日中のだるさを主訴に来院した。第1子の出産後から体重が増え、10年で10kg増加した。健診を受けたことはない。喫煙歴はない。飲酒は機会飲酒。就労はしておらず、運動習慣はない。身長152cm、体重65kg。血圧144/92mmHg。尿所見：蛋白(-)、糖3+、ケトン体(-)、潜血(-)。血液生化学所見：総蛋白7.4g/dL、アルブミン4.0g/dL、尿素窒素14mg/dL、クレアチニン0.7mg/dL、尿酸7.2mg/dL、血糖188mg/dL、HbA1c8.2%(基準4.6~6.2)、総コレステロール252mg/dL、トリグリセリド220mg/dL、HDLコレステロール36mg/dL、Na135mEq/L、K4.6mEq/L、Cl101mEq/L。12誘導心電図で異常を認めない。

食事療法の内容で正しいのはどれか。

- a 食塩摂取量を10g/日未満とする。
- b 蛋白質摂取量を35g/日未満とする。
- c 脂質は飽和脂肪酸を50g/日以上とする。
- d 総エネルギー摂取量を1,800kcal/日とする。
- e 総エネルギー摂取量の40~60%を炭水化物由来とする。

44 79歳の女性。脂質異常症と2型糖尿病のため定期的に通院中である。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行以前は外出を好み活動的であったが、ここ3年間は家で過ごすことが増えている。本日バスを利用して予約どおりに来院した。身だしなみは整っている。顔面に擦過傷を認めたため原因を質問したところ「最近よくつまづくようになり、3日前に玄関先で転び顔をぶつけてしまいました」と話した。約1か月前から、好きだった花の手入れや食事の準備が億劫になり、寝付きが悪く熟睡できないという。また、時折食事中にむせるようになり、食欲が低下して食事量も減少傾向であるという。

この患者で保たれていると考えられるのはどれか。

- a 意欲
- b 運動機能
- c 栄養状態
- d 嚥下機能
- e 日常生活動作〈ADL〉

45 58歳の男性。定期受診で来院した。高血圧性腎硬化症による慢性腎臓病で半年前から自宅近くの診療所に通院している。喫煙は35年前から20本/日。飲酒はビール350 mL/日を週2回。身長170 cm、体重84 kg。BMI 29.0。脈拍72/分、整。血圧136/88 mmHg。尿所見：蛋白2+、糖(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球392万、Hb 12.8 g/dL、Ht 37%、白血球5,600、血小板21万。血液生化学所見：総蛋白7.0 g/dL、アルブミン3.8 g/dL、尿素窒素28 mg/dL、クレアチニン1.8 mg/dL、尿酸7.8 mg/dL、Na 140 mEq/L、K 4.9 mEq/L、Cl 103 mEq/L、Ca 9.4 mg/dL、P 5.6 mg/dL。1か月前の食事調査で蛋白質摂取量168 g/日(2.0 g/kg)、食塩摂取量9.5 g/日であった。

この患者の腎機能維持に有用性が低いのはどれか。

- a 禁煙
- b 禁酒
- c 体重の減量
- d 食塩摂取制限
- e 蛋白質摂取制限

46 40歳の女性。食後、数時間で起こる動悸、発汗および手の震えを主訴に来院した。症状は朝食後の外出時に経験することが多く、摂食で改善する。身長160 cm、体重65 kg。体温36.1℃。脈拍64/分、整。血圧128/84 mmHg。甲状腺腫と頸部リンパ節とを触知しない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。尿所見：蛋白(－)、糖(－)。血液生化学所見：総ビリルビン0.6 mg/dL、AST 32 U/L、ALT 48 U/L、尿素窒素18 mg/dL、クレアチニン0.5 mg/dL、空腹時血糖112 mg/dL、HbA1c 5.6%(基準4.6～6.2)。

この患者の症状出現時に増加していることが予想されるホルモンはどれか。3つ選べ。

- a グルカゴン
- b アドレナリン
- c コルチゾール
- d サイロキシン
- e アルドステロン

47 53歳の男性。胸痛と悪心を主訴に救急車で搬入された。本日午前4時から胸痛と悪心が出現した。午前8時ごろまで我慢していたが、症状が改善しないため救急車を要請した。15年前から糖尿病、脂質異常症で自宅近くの診療所に通院している。喫煙は10本/日を33年間。身長168cm、体重75kg。心拍数72/分、整。血圧126/60mmHg。呼吸数14/分。SpO₂98%(リザーバー付マスク10L/分 酸素投与下)。心音と呼吸音とに異常を認めない。来院時の12誘導心電図で、前胸部誘導にST上昇を認めた。経胸壁心エコー検査で前壁中隔の壁運動低下を認め、左室駆出率は40%であった。心筋トロポニンT迅速検査が陽性で急性前壁梗塞と診断した。緊急冠動脈造影で左前下行枝に完全閉塞、左回旋枝に50%の狭窄を認めたため、引き続き経皮的冠動脈形成術が行われ、左前下行枝にステントを留置した。血清CKの最高値は、2,230U/L(発症8時間後)(基準30~140)であった。

今後の心臓リハビリテーションの説明で適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 「食事やお薬についても勉強していきましょう」
- b 「リハビリは左回旋枝の治療が終了してから開始します」
- c 「治療後2週間はベッド上の安静臥床を守る必要があります」
- d 「心拍数が130/分程度に増加する負荷をかけていきましょう」
- e 「胸痛や息切れが出現するようであればリハビリの強度を上げません」

48 63歳の男性。2か月前から咳嗽が出現し、改善しないため来院した。身長167 cm、体重65 kg。体温36.2℃。脈拍62/分、整。血圧124/80 mmHg。呼吸数14/分。SpO₂95%(room air)。心音に異常を認めない。呼吸音は左上肺野で軽度減弱を認める。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。胸部エックス線写真で左上肺野に結節影を認めた。FDG-PET像(別冊No. 3)を別に示す。精査により、肺扁平上皮癌、臨床病期ⅢA期と診断され、化学放射線療法の適応と判断された。

この患者で、放射線療法単独と比べ薬物による抗癌治療を併用する意義はどれか。

- a 生命予後の改善
- b 白血球減少の抑制
- c 放射線肺炎の予防
- d 放射線食道炎の予防
- e 放射線皮膚炎の軽減

別 冊

No. 3

49 82歳の女性。食欲と活動性の低下を主訴に来院した。3日前から食欲が低下し、当日の朝はいつもの時間に起床できなかったため、心配した家族に連れられて受診した。お薬手帳によると、自宅近くの診療所で1年以上前からアンジオテンシン変換酵素〈ACE〉阻害薬、カルシウム拮抗薬、ビスホスホネート製剤およびNSAIDの処方を受けており、1週間前からベンゾジアゼピン系睡眠薬が追加されていた。意識レベルはJCS I-1から2程度。体温36.0℃。脈拍64/分、整。血圧160/96 mmHg。呼吸数16/分。血液所見：赤血球350万、Hb 10.2 g/dL、Ht 32%、白血球6,200、血小板22万。血液生化学所見：総蛋白6.0 g/dL、アルブミン3.6 g/dL、総ビリルビン0.6 mg/dL、AST 30 U/L、ALT 13 U/L、LD 220 U/L(基準120~245)、ALP 83 U/L(基準38~113)、 γ -GT 13 U/L(基準8~50)、尿素窒素29 mg/dL、クレアチニン2.1 mg/dL、血糖102 mg/dL、Na 132 mEq/L、K 6.0 mEq/L、Cl 93 mEq/L、Ca 11.5 mg/dL。精査のため入院することとなった。

入院後も継続可能な薬剤はどれか。

- a NSAID
- b カルシウム拮抗薬
- c ビスホスホネート製剤
- d ベンゾジアゼピン系睡眠薬
- e アンジオテンシン変換酵素〈ACE〉阻害薬

50 76歳の女性。嗄声を主訴に来院した。3か月前から声がかすれることに気付いた。様子を見ていたが症状が改善しないため受診した。高血圧症、脂質異常症で自宅近くの診療所に通院中である。喫煙は10本/日を40年間。2年前から禁煙している。意識は清明。体温36.2℃。脈拍76/分、整。血圧142/78 mmHg。呼吸数18/分。SpO₂98%(room air)。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。下腿浮腫なし。血液所見：赤血球391万、Hb12.7 g/dL、Ht36%、白血球8,300、血小板23万。血液生化学所見：総蛋白7.2 g/dL、アルブミン3.5 g/dL、総ビリルビン0.5 mg/dL、AST25 U/L、ALT17 U/L、尿素窒素21 mg/dL、クレアチニン1.1 mg/dL。CRP0.1 mg/dL。5年前と今回受診時の胸部エックス線写真(別冊No. 4)を別に示す。

次に行う検査として最も正しいのはどれか。

- a 胸部CT
- b 胸腔鏡検査
- c 気管支鏡検査
- d 呼吸機能検査
- e 冠動脈造影カテーテル検査

別 冊

No. 4

51 52歳の男性。咽頭痛と呼吸困難を主訴に救急外来を受診した。4時間前から強い嚥下痛のため食事が摂れなくなった。2時間前から声を出しにくくなり、呼吸困難を自覚するようになった。意識は清明。体温38.5℃。脈拍96/分、整。血圧150/90 mmHg。呼吸数28/分。SpO₂90%(マスク5L/分 酸素投与下)。顔貌は苦悶様で、診察中に吸気性喘鳴が増悪した。

まず行うのはどれか。

- a 気道確保
- b 経鼻胃管挿入
- c 消炎鎮痛薬の投与
- d 気管支拡張薬の吸入
- e テオフィリンの静脈内投与

52 28歳の初妊婦(1妊0産)。妊娠35週3日、胎動減少を主訴に受診した。妊娠初期から妊婦健康診査を受けていた。妊娠34週1日の妊婦健康診査において、推定胎児体重が1,700g(-1.9SD)の胎児発育不全を指摘されている。今朝から胎動の減少を自覚し心配になり受診した。性器出血や下腹部痛の自覚はない。身長162cm、体重54kg(非妊時48kg)。体温36.8℃。脈拍72/分、整。血圧136/65 mmHg。腹部は妊娠子宮で膨隆し、柔らかく圧痛は認めない。来院時の胎児心拍数陣痛図で基線は正常脈、基線細変動は中等度で、40分間以上の計測において一過性頻脈および徐脈を認めない。妊娠初期検査：血液型O型RhD(+)、間接Coombs試験陰性。

この胎児の健常性を評価するために行う超音波検査項目として適切なのはどれか。3つ選べ。

- a 胎盤の厚さ
- b 推定胎児体重
- c 羊水ポケット
- d 胎児呼吸様運動
- e 子宮動脈血流速度波形

53 11歳の男児。右下腹部痛を主訴に母親に連れられて来院した。朝からみぞおち付近の不快感を自覚していたが、学校に登校した。給食後に嘔吐し、腹痛が次第に増強したため受診した。体温38.5℃。脈拍108/分、整。血圧118/62 mmHg。呼吸数22/分。SpO₂99%(room air)。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は右下腹部に限局した圧痛を認め、筋性防御を認める。血液所見：赤血球430万、Hb12.6 g/dL、Ht40%、白血球13,500、血小板25万。血液生化学所見：総蛋白6.8 g/dL、アルブミン4.0 g/dL、AST20 U/L、ALT10 U/L、尿素窒素12 mg/dL、クレアチニン0.5 mg/dL、Na140 mEq/L、K4.0 mEq/L、Cl102 mEq/L。CRP8.2 mg/dL。腹部超音波像(別冊No. 5)を別に示す。

この患者で予測される身体所見はどれか。

- a Dance 徴候
- b Murphy 徴候
- c Rosenstein 徴候
- d Courvoisier 徴候
- e Grey-Turner 徴候

別 冊

No. 5

54 1か月の女兒。1か月健診で心雑音を指摘され、母親に連れられて来院した。普段は元気にしており、哺乳も良好だという。自宅で母乳を飲んでから約2時間30分が経過している。身長と体重の計測をしている際に目覚め、診察を待っている間に泣き出した。診察室で胸部の聴診を試みたが、母親に抱かれていても泣き続けており、聴診は困難である。

心雑音を評価するために最も適切な対応はどれか。

- a 薬剤による鎮静を行う。
- b おもちゃを手に持たせて遊ばせる。
- c 母乳を与えてから再度聴診を試みる。
- d 聴診をあきらめて心エコー検査を行う。
- e アニメーションビデオを用いて興味をひく。

55 32歳の1回経産婦(2妊1産)。妊娠39週6日、規則的な子宮収縮を主訴に来院した。これまでの妊娠経過に異常を認めない。午前1時、10分ごとの規則的な子宮収縮を自覚し、次第に増強したため午前4時に入院した。内診で子宮口は4cm開大、展退度は60%、硬度は中、児頭下降度はSP-2cmであった。午前8時に破水を認めた。その時点の内診で子宮口は6cm開大、下降度はSP-1cmであった。その後、陣痛周期は3分となった。午後1時の内診で子宮口は全開大、児頭下降度はSP+2cm、先進する小泉門を1時方向に触知し、矢状縫合はほぼ母体の骨盤縦径に一致していた。この時点の陣痛周期は3分で、持続時間は1分であった。

この産婦の分娩経過で正しいのはどれか。

- a 遷延分娩
- b 早期破水
- c 微弱陣痛
- d 分娩停止
- e 後方後頭位

56 75歳の男性。血痰を主訴に来院した。血痰は3か月前から出現し、最近、量、回数ともに増加している。生来健康で、昨年の検診では異常を指摘されなかった。体温36.0℃。脈拍76/分、整。血圧128/72 mmHg。呼吸数16/分。SpO₂97% (room air)。胸痛はない。呼吸音に異常を認めない。口腔内と咽頭とに異常を認めない。胸部エックス線写真と胸部CTで異常を認めない。

次に行う検査として正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 喀痰細胞診
- b 縦隔鏡検査
- c 気管支鏡検査
- d 胸腔鏡下肺生検
- e 肺動脈造影検査

57 14歳の男子。学校検尿で蛋白尿を指摘され来院した。第1次検査と第2次検査の結果(別冊No. 6)を別に示す。受診結果が判明するまでは、部活動顧問教諭からバスケット部の活動を中止するよう指示されている。自覚症状はない。身長165 cm、体重50 kg。血圧110/66 mmHg。眼瞼に浮腫を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。早朝尿所見：蛋白(－)(9 mg/dL)、潜血(－)。随時尿所見：蛋白3+(560 mg/dL)、潜血(－)。血液所見と血液生化学所見とに異常を認めない。腎超音波検査で異常を認めない。

適切な生活指導はどれか。

- a 「入院治療が必要です」
- b 「自宅安静が必要です」
- c 「体育実技は見学してください」
- d 「軽い運動だけ参加してください」
- e 「運動制限は必要ありません」

別 冊

No. 6

58 46歳の男性。右母趾基部の疼痛を主訴に来院した。昨年も同様の症状があり、その時は翌日軽快した。先月から高血圧症と脂質異常症に対して投薬治療を受けている。2日前に友人とゴルフに行き、飲酒した後に疼痛が出現した。今回は症状が改善しないため受診した。身長171 cm、体重82 kg。右第一中足趾節関節に発赤と疼痛を伴う腫脹を認める。明らかな結節はない。

この患者の症状出現の誘因とならないのはどれか。

- a 飲 酒
- b 運 動
- c 脱 水
- d スタチンの開始
- e 降圧利尿薬の開始

次の文を読み、59～61の問いに答えよ。

56歳の女性。強い頭痛後に、意識障害を生じたため救急車で搬入された。

現病歴 : 自宅で家事をしていたところ、突然強い頭痛を訴えた。その後まもなく反応が無くなったため、長女が救急車を要請した。2日前に頭痛で自宅近くの診療所を受診した際の検査結果を長女が持参している。

既往歴 : 12歳時に急性虫垂炎で手術。2日前に頭痛があり、自宅近くの診療所で処方された鎮痛薬を内服している。

生活歴 : 夫、長女および長男との4人暮らし。30年前に会社を退職した。喫煙歴はない。飲酒は機会飲酒。

家族歴 : 特記すべきことはない。

現症 : 意識レベルはJCSⅢ-100。身長152 cm、体重56 kg。体温37.2℃。心拍数56/分、整。血圧192/102 mmHg。呼吸数24/分。SpO₂96%(マスク5 L/分酸素投与下)。瞳孔径は両側3.0 mm。対光反射は両側で遅延している。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。頭部に外傷はない。口腔内と咽頭とに異常を認めない。頸静脈の怒張を認めない。甲状腺腫と頸部リンパ節とを触知しない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。浮腫を認めない。腱反射に異常を認めない。

検査所見(持参したもの) : 尿所見：蛋白(－)、糖(－)。血液所見：赤血球453万、Hb13.0 g/dL、Ht39%、白血球9,600(分葉核好中球52%、好酸球5%、好塩基球1%、単球5%、リンパ球36%)、血小板26万。血液生化学所見：総蛋白6.8 g/dL、アルブミン3.9 g/dL、総ビリルビン0.9 mg/dL、直接ビリルビン0.3 mg/dL、AST30 U/L、ALT26 U/L、LD130 U/L(基準120～245)、尿素窒素15 mg/dL、クレアチニン0.7 mg/dL、血糖88 mg/dL、Na138 mEq/L、K4.1 mEq/L、Cl100 mEq/L。

59 まもなく、刺激に対する反応がなくなり、自発呼吸が停止した。頸動脈は触知できなかった。モニター心電図(別冊No. 7)を別に示す。

この時点での心電図診断で正しいのはどれか。

- a 心静止
- b 心室細動
- c 心房細動
- d 無脈性心室頻拍
- e 無脈性電気活動<PEA>

別 冊

No. 7

60 その後、直ちに胸骨圧迫およびバッグバルブマスク換気を開始し、静脈路確保を行った。アドレナリンを静脈投与した後に、自己心拍が再開し、心拍数 90/分、整。血圧 126/72 mmHg となった。自発呼吸は認めなかったため気管挿管を行い集中治療室へ入院となった。意識レベルは JCSⅢ-300 から JCSⅢ-100 となった。SpO₂ は 98 % (吸入酸素濃度 60 %) であった。自発呼吸は回復しなかった。入院後に撮影した頭部単純 CT (別冊 No. 8) を別に示す。

行うべき治療で誤っているのはどれか。

- a 血圧管理
- b 人工呼吸
- c 体温管理療法
- d 緊急ペーシング
- e 高浸透圧利尿薬投与

別 冊

No. 8

61 入院5日目、昇圧薬を継続して投与していたが、瞳孔径が両側5.0mmとなり、対光反射は両側で消失した。その後、血圧が低下し、心停止となり、死亡確認を行った。

その後の対応で正しいのはどれか。

- a 警察に連絡する。
- b 保健所に連絡する。
- c 司法解剖を依頼する。
- d 死亡診断書を作成する。
- e 医療安全支援センターに届け出る。

次の文を読み、62～64の問いに答えよ。

75歳の男性。労作時の呼吸困難を主訴に来院した。

現病歴 : 数年前から労作時の息切れがあったが、約1年前から階段や坂道は途中で休まないと昇れなくなった。1週間前から呼吸困難と膿性痰が出現し、改善しないため受診した。

既往歴 : 60歳時より高血圧症。

生活歴 : 喫煙は25歳から現在まで40本/日を50年間。飲酒は機会飲酒。

家族歴 : 母が気管支喘息。

現症 : 意識は清明。身長163 cm、体重65 kg。体温36.6℃。脈拍92/分、整。血圧142/56 mmHg。呼吸数24/分。SpO₂90%(room air)。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。頸静脈の怒張を認めない。胸鎖乳突筋の肥大を認める。心音に異常を認めない。呼吸音は喘鳴が聴取され、全体的に呼吸音が減弱している。

検査所見 : 血液所見：赤血球460万、Hb13.7 g/dL、Ht42%、白血球9,400(好中球59.7%、好酸球12.3%、好塩基球0.4%、単球6.7%、リンパ球20.9%)、血小板22万。血液生化学所見：総ビリルビン0.9 mg/dL、AST24 U/L、ALT16 U/L、LD220 U/L(基準120～245)、尿素窒素12 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、Na135 mEq/L、K4.4 mEq/L、Cl97 mEq/L。動脈血ガス分析(room air)：pH7.41、PaCO₂54 Torr、PaO₂56 Torr、HCO₃⁻33.1 mEq/L。

62 この患者で正しいのはどれか。

- a II型呼吸不全
- b 呼気時間短縮
- c 吸気性呼吸困難
- d PaO₂/F₁O₂<200
- e 呼吸性アルカローシス

63 対応で誤っているのはどれか。

- a 酸素投与
- b 抗菌薬投与
- c 副腎皮質ステロイド投与
- d 短時間作用性 β_2 刺激薬吸入
- e ヒスタミン H_1 受容体拮抗薬投与

64 その後、 SpO_2 86% に低下したため、ストレッチャーに移動し、マスク 5L/分の酸素投与を行った。喘鳴はやや改善したが、呼吸困難は続いていた。意識レベルは JCS II-10。心拍数 130/分、整。血圧 152/82 mmHg。呼吸数 28/分。動脈血ガス分析(マスク 5L/分 酸素投与下)：pH 7.30、 $PaCO_2$ 86 Torr、 PaO_2 92 Torr、 HCO_3^- 36 mEq/L。

適切な治療法はどれか。

- a 気管切開
- b 気管挿管
- c 高流量酸素
- d 高気圧酸素治療
- e 非侵襲的陽圧換気(NPPV)

次の文を読み、65～67の問いに答えよ。

56歳の男性。右季肋部痛を主訴に来院した。

現病歴 : 以前から右背部痛を自覚していたが、1か月前から痛みの頻度が増加し、就寝初期の右季肋部痛も伴うようになったため自宅近くの医院を受診した。腹部超音波検査で胆嚢結石を認め、手術目的に紹介受診した。

既往歴 : 1年前から高血圧症と2型糖尿病で降圧薬と経口糖尿病薬を内服している。

生活歴 : 喫煙は20本/日を35年間。飲酒は焼酎1合/日を10年間。

家族歴 : 母が2型糖尿病で治療中である。

現症 : 意識は清明。身長171 cm、体重70 kg。体温36.1℃。脈拍72/分、整。血圧148/96 mmHg。SpO₂ 98% (room air)。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦で、右季肋部に圧痛を認める。

検査所見 : 尿所見：蛋白(－)、糖(－)、ケトン体(－)、潜血(－)。血液所見：赤血球580万、Hb 15.9 g/dL、Ht 51%、白血球8,400(好中球70%、好酸球1%、好塩基球1%、単球4%、リンパ球24%)、血小板27万、PT-INR 0.95(基準0.9～1.1)。血液生化学所見：総蛋白7.6 g/dL、アルブミン5.0 g/dL、総ビリルビン0.8 mg/dL、AST 13 U/L、ALT 18 U/L、LD 120 U/L(基準120～245)、ALP 55 U/L(基準38～113)、 γ -GT 16 U/L(基準8～50)、CK 50 U/L(基準30～140)、尿素窒素10 mg/dL、クレアチニン0.8 mg/dL、尿酸6.5 mg/dL、血糖95 mg/dL、HbA1c 6.8%(基準4.6～6.2)、トリグリセリド207 mg/dL、HDLコレステロール242 mg/dL、LDLコレステロール162 mg/dL、Na 142 mEq/L、K 4.0 mEq/L、Cl 102 mEq/L、Ca 9.3 mg/dL。CRP 0.1 mg/dL。心電図で異常を認めない。胸部エックス線写真で心胸郭比46%。上部消化管内視鏡検査で異常所見を認めない。腹部超音波検査、腹部単純CT及び磁気共鳴胆管膵管撮影(MRCP)で胆嚢内に径5～8 mmの結石を数個認めたが、他の異常所見を認めない。

胆嚢結石症と診断し、待期的に腹腔鏡下胆嚢摘出術を予定することとした。

- 65 この患者に胆嚢摘出術を勧める根拠となるのはどれか。
- a 年 齢
 - b 性 別
 - c 主 訴
 - d 既往歴
 - e 飲酒歴
- 66 周術期管理について誤っているのはどれか。
- a 前日、夕食を摂取する。
 - b 当日術前、降圧薬を内服する。
 - c 当日術前、経口糖尿病薬を内服する。
 - d 翌日、食事を開始する。
 - e 翌日、経口鎮痛薬を内服する。
- 67 腹腔鏡下胆嚢摘出時に胆嚢底部を挙上すると脈管損傷に注意を要する領域(Calot三角)が出現する。解剖図(別冊No. 9)を別に示す。
この領域の境界はどれか。3つ選べ。
- a A
 - b B
 - c C
 - d D
 - e E

別 冊 No. 9

次の文を読み、68～70の問いに答えよ。

76歳の女性。歩行障害を主訴に来院した。

現病歴 : 6年前から左上肢の動かしにくさが出現し、4年前から歩くのが遅くなった。4年前から自宅近くの診療所でレボドパ(L-dopa)を処方され症状は改善した。1年前から内服薬の効果が持続しなくなり、歩行困難が進行した。半年前から、歩行中に足が止まってしまうことがあり、2回転倒したため専門外来を受診した。

既往歴 : 脂質異常症でスタチンを内服している。

生活歴 : 喫煙歴、飲酒歴はない。転倒しないようにほとんど外出しない。室内のトイレ歩行などの日常生活動作は自立している。

家族歴 : 特記すべきことはない。

現症 : 意識は清明。身長158 cm、体重45 kg。体温36.2℃。脈拍64/分、整。血圧110/60 mmHg。胸腹部に異常を認めない。神経診察では仮面様顔貌、小声および摂食時のむせこみを認める。四肢筋強剛、動作緩慢を認める。筋力低下、感覚低下は認めない。

検査所見 : 血液所見：赤血球340万、Hb 11.2 g/dL、白血球6,300、血小板13万。血液生化学所見：総蛋白6.3 g/dL、アルブミン4.5 g/dL、総ビリルビン0.2 mg/dL、AST 24 U/L、ALT 18 U/L、LD 160 U/L(基準120～245)、 γ -GT 41 U/L(基準8～50)、CK 58 U/L(基準30～140)、尿素窒素18 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、血糖98 mg/dL、Na 138 mEq/L、K 4.0 mEq/L、Cl 97 mEq/L。CRP 0.2 mg/dL。

68 今回、撮像したドパミントランスポーター SPECT(別冊No. 10A)と ^{123}I -MIBG 交感神経心筋シンチグラム(別冊No. 10B)を別に示す。

診断はどれか。

- a Parkinson 病
- b 多系統萎縮症
- c 進行性核上性麻痺
- d 大脳皮質基底核変性症
- e 薬剤性 Parkinson 症候群

別 冊 No. 10 A、B

69 この患者に認められる可能性が高い症候はどれか。

- a 下肢痙縮
- b 測定障害
- c 姿勢時振戦
- d 眼球運動障害
- e 姿勢反射障害

70 薬物療法で改善しない症状に対して、在宅生活を継続するために必要なのはどれか。3つ選べ。

- a 嚥下訓練
- b 住宅改修
- c 歩行訓練
- d 失語症訓練
- e 短下肢装具

次の文を読み、71～73の問いに答えよ。

27歳の女性。胸痛と呼吸困難を主訴に来院した。

現病歴 : 昨日から右前胸部痛を自覚した。息を吸うと痛みが悪化するため、深呼吸ができなかった。本日は胸痛の悪化に加え、労作時の呼吸困難も出現したため救急外来を受診した。

既往歴 : 3か月前から経口避妊薬を内服している。

生活歴 : パートナーと2人暮らし。事務職。喫煙歴はない。飲酒は機会飲酒。

家族歴 : 母方の祖父が癌(詳細不明)。母が糖尿病と高血圧症。

現症 : 意識は清明。身長163 cm、体重60 kg。体温38.0℃。脈拍120/分、整。血圧112/64 mmHg。呼吸数32/分。SpO₂88%(room air)。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。頸静脈の怒張を認める。心音はII音の亢進を認める。呼吸音はcracklesやwheezesはなく、胸膜摩擦音も聴取しないが、深呼吸ができていない。右下腿に浮腫を認める。

検査所見 : 血液所見：赤血球430万、Hb13.1 g/dL、Ht38%、白血球10,100(桿状核好中球30%、分葉核好中球45%、好酸球1%、好塩基球1%、単球6%、リンパ球17%)、血小板23万。血液生化学所見：総ビリルビン0.9 mg/dL、AST25 U/L、ALT12 U/L、LD315 U/L(基準120～245)。動脈血ガス分析(room air)：pH7.48、PaCO₂26 Torr、PaO₂52 Torr、HCO₃⁻19.0 mEq/L。心電図は洞性頻脈、I誘導で深いS波、III誘導でQ波とT波の陰転化を認める。

71 この患者の肺胞気-動脈血酸素分圧較差(A-aDO₂)を求めよ。なお、大気圧 760 Torr、37℃での飽和水蒸気圧 47 Torr、呼吸商 0.8 とする。

ただし、小数点以下の数値が得られた場合には、小数第 1 位を四捨五入すること。

解答：① ② Torr

① ②

0 0

1 1

2 2

3 3

4 4

5 5

6 6

7 7

8 8

9 9

72 診断に有用な検査はどれか。

a KL-6

b D ダイマー

c フェリチン

d β-D グルカン

e プロカルシトニン

73 胸部造影 CT(別冊No. 11)を別に示す。

最も適切な治療薬はどれか。

- a ヘパリン
- b アスピリン
- c 血管拡張薬
- d 殺細胞性抗癌薬
- e 副腎皮質ステロイド

別 冊

No. 11

74 21歳の男性。意識障害のため救急車で搬入された。家族によると約2週間前から口渇、頻尿を訴えていたという。意識レベルはJCS II-10。身長170 cm、体重56 kg。体温37.1℃。心拍数92/分、整。血圧96/64 mmHg。呼吸数24/分。SpO₂98%(room air)。皮膚は乾燥している。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。尿所見：糖4+、ケトン体3+。血液生化学所見：尿素窒素42 mg/dL、クレアチニン2.1 mg/dL、血糖564 mg/dL、HbA1c 9.6%(基準4.6~6.2)、Na 144 mEq/L、K 4.8 mEq/L、Cl 104 mEq/L。

この患者に直ちに投与すべき輸液の組成はどれか。

	Na 濃度(mEq/L)	K 濃度(mEq/L)	ブドウ糖濃度(%)
a	0	0	5
b	0	20	5
c	77	0	2.5
d	77	20	2.5
e	154	0	0
f	154	20	0

75 30歳の健常男性で、身長175 cm、体重70 kg。BMI 22.8、腹囲81 cm、体脂肪率18%である場合の推定細胞外液量を求めよ。

ただし、小数点以下の数値が得られた場合には、小数第1位を四捨五入すること。

解答：① ② L

① ②

0 0

1 1

2 2

3 3

4 4

5 5

6 6

7 7

8 8

9 9

